

# 日本の父親の健康状態および 育児への関わりに関する知見

国立成育医療研究センター・社会医学研究部

加藤承彦

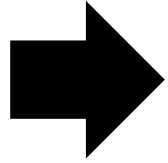
1. 目的と概要
2. 得られた知見の紹介
3. まとめと提言

1. 目的と概要

2. 得られた知見の紹介

3. まとめと提言

# 本研究で取り組む研究項目と目標



## 項目 1. 日本の父親の健康・生活実態把握

父親の健康・生活実態に関して、代表性の高い政府統計（国民生活基礎調査・社会生活基本調査・21世紀出生児縦断調査などの解析と科学的根拠の提示

【目標】 父親支援の意義・必要性や支援が必要な事柄の把握

## 項目 2. 父親支援の既存制度の把握

全国の1,700自治体、イクボス企業同盟加盟企業230社、NPO法人広場全協を対象に、質問票調査を実施し、父親支援の取り組みの実施状況の把握と困難な点の抽出

【目標】 全国の先進的な父親支援の取り組みの整理と紹介

## 項目 3. 父親支援の海外調査

①各国の省庁や自治体の公式HPを対象とするインターネット調査による把握

②父親の健康に関する介入方法やその評価に関する系統的レビューの実施

【目標】 他の先進国の取り組みをもとに、日本の事業・評価ツールの開発に活用

## 項目 4. 自治体の父親支援モデルの構築・評価

①すでに自治体が行っている父親支援事業の前後比較評価

②本研究班でモデル自治体とともに開発する父親支援プログラムの前後比較評価

【目標】 複数の父親支援事業・プログラムの効果検証と提示

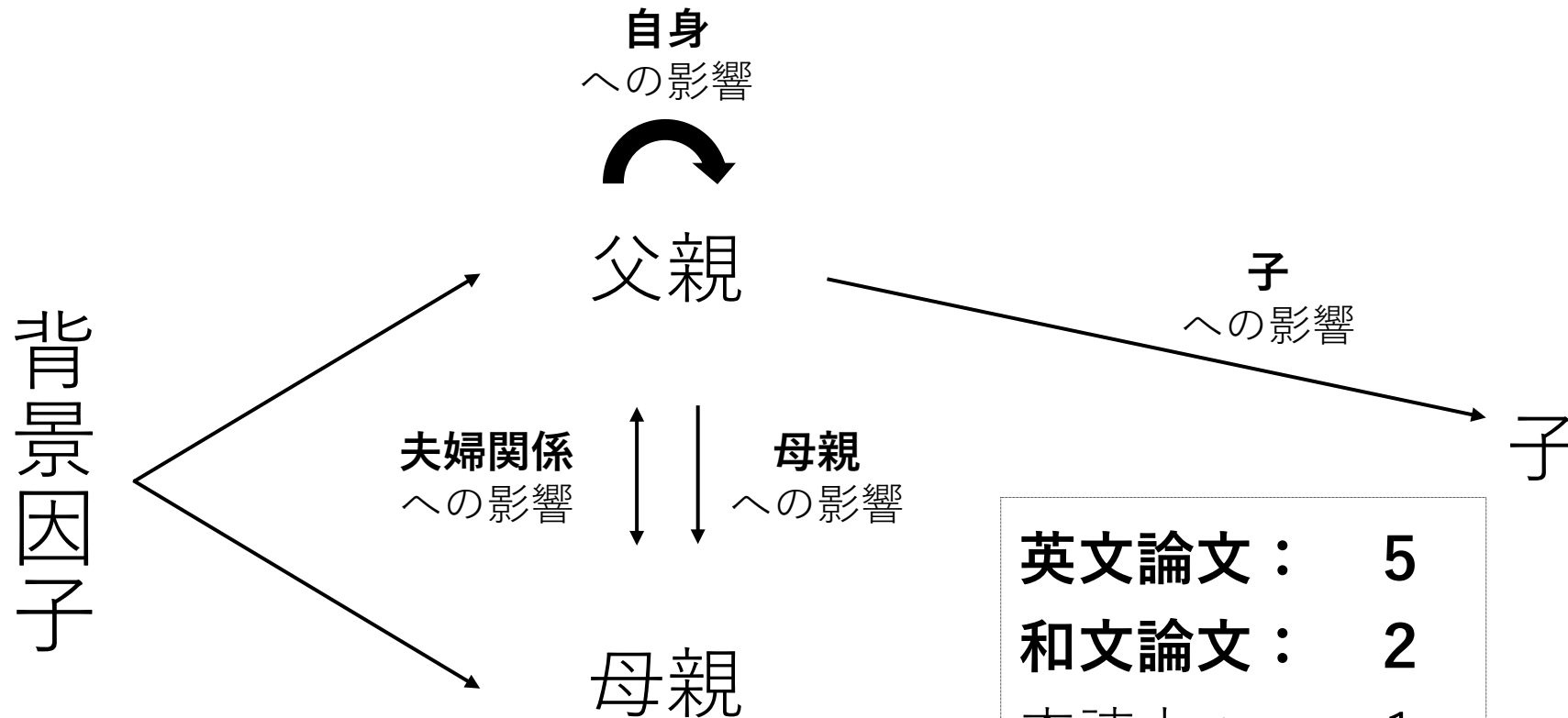
**知見は自治体関係者や父親支援に携わる方々への還元を目指す！**

# 父親の育児への関わりの

## I. 決定要因

## II. 現状

## III. 影響



英文論文 :	5
和文論文 :	2
査読中 :	1
論文執筆中 :	4
分析中 :	6

**合計 : 18**

1. 目的と概要
2. 得られた知見の紹介
3. まとめと提言

父親の育児への関わり の現状

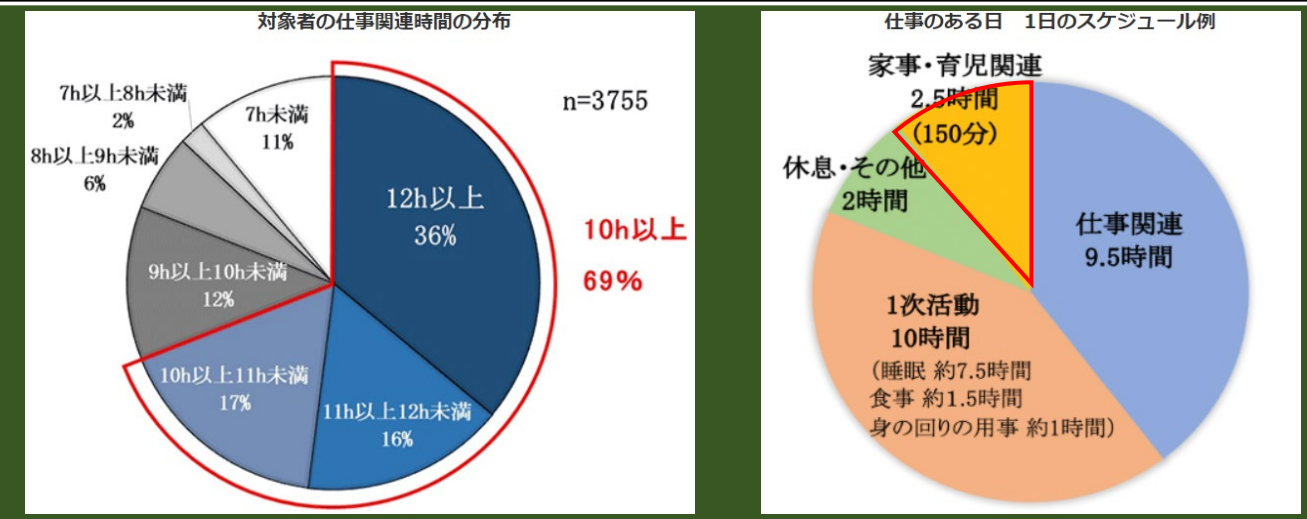
# 末子が未就学児を持つ父親の、仕事がある日の生活時間を「仕事関連時間」ごとに4つのカテゴリーの分布を調べる

- データ：社会生活基本調査（2016年）調査票A
- 分析対象者：3,755人
- 背景・要因：

父親の家事・育児関連時間が増えない原因として、父親が仕事関連に費やす時間が長いことが指摘されている。

- アウトカム：1日24時間における「仕事関連時間」、「1次活動時間」、「休息・その他の時間」、「家事・育児関連時間」の分布。

結果：



父親の「仕事関連時間」の長さごとの「1次活動」、「休息・その他」、「家事・育児関連」の時間

父親の仕事関連時間	仕事関連		一次活動					休息・その他		家事・育児関連	
	平均時間	1日あたり	睡眠	身の回りの用事	食事	一次活動合計平均時間	1日あたり	平均時間	1日あたり	平均時間	1日あたり
12h以上	13:35	57%	6:44	0:55	1:07	8:46	37%	1:19	5%	0:10	1%
11h-12h未満	11:18	47%	7:16	1:04	1:20	9:40	40%	2:28	10%	0:24	2%
10h-11h未満	10:18	43%	7:32	1:04	1:23	9:59	42%	2:52	12%	0:40	3%
9h-10h未満	9:21	39%	7:32	1:11	1:30	10:13	43%	3:20	14%	0:53	4%
8h-9h未満	8:24	35%	7:46	1:10	1:36	10:32	44%	3:50	16%	1:05	5%
7h-8h未満	7:23	31%	7:56	1:05	1:35	10:36	44%	4:48	20%	1:05	5%
7h未満	2:10	9%	8:22	1:23	1:44	11:29	48%	7:31	31%	2:42	11%

- 1日24時間から、本研究のデータおよび先行研究から推計された「1次活動時間」10時間と、「休息・その他の時間」の2時間を差し引いた場合、2.5時間（150分）の「家事・育児関連時間」を確保するためには「仕事関連時間」を9.5時間未満にする必要がある。



# 父親の育児参加を阻害・促進する要因の探索

• データ：  
21世紀出生児縦断調査  
(平成22年出生児)

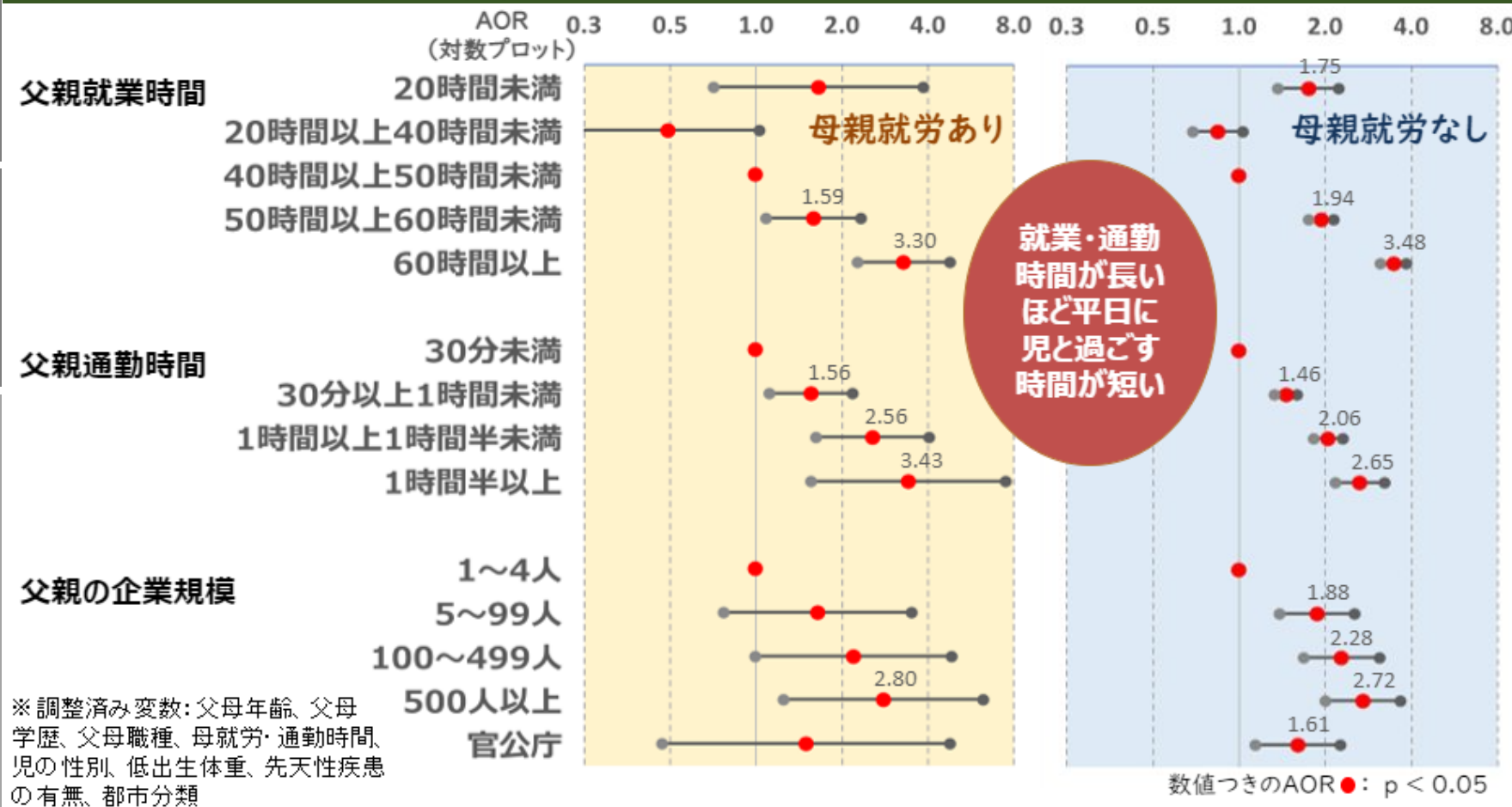
• 分析対象者：  
父親が就労している世帯  
30,902件

• アウトカム：父親の育児関与

- ① 父親が平日に子と過ごす時間
- ② 父親が休日に子と過ごす時間
- ③ 父親の育児頻度

(2011年 1歳半時点)

## 結果：父親の就労関連変数と平日に子と過ごす時間の長さとの関連 (調整済みオッズ比 (AOR))



• 母親の就業有無に関わらず、父親の就業・通勤時間が長いほど、平日の育児時間や頻度は少ない。

父親の健康状態  
(メンタルヘルスの不調)

# 日本の父親で産後1年間に精神的な不調のリスクありと判定される人の割合と、そのリスク因子はなにか？

• データ：

国民生活基礎調査

(2016年)

世帯票・健康票

• 分析対象者： 生後1歳未満の子どもがいる夫婦

3,514世帯

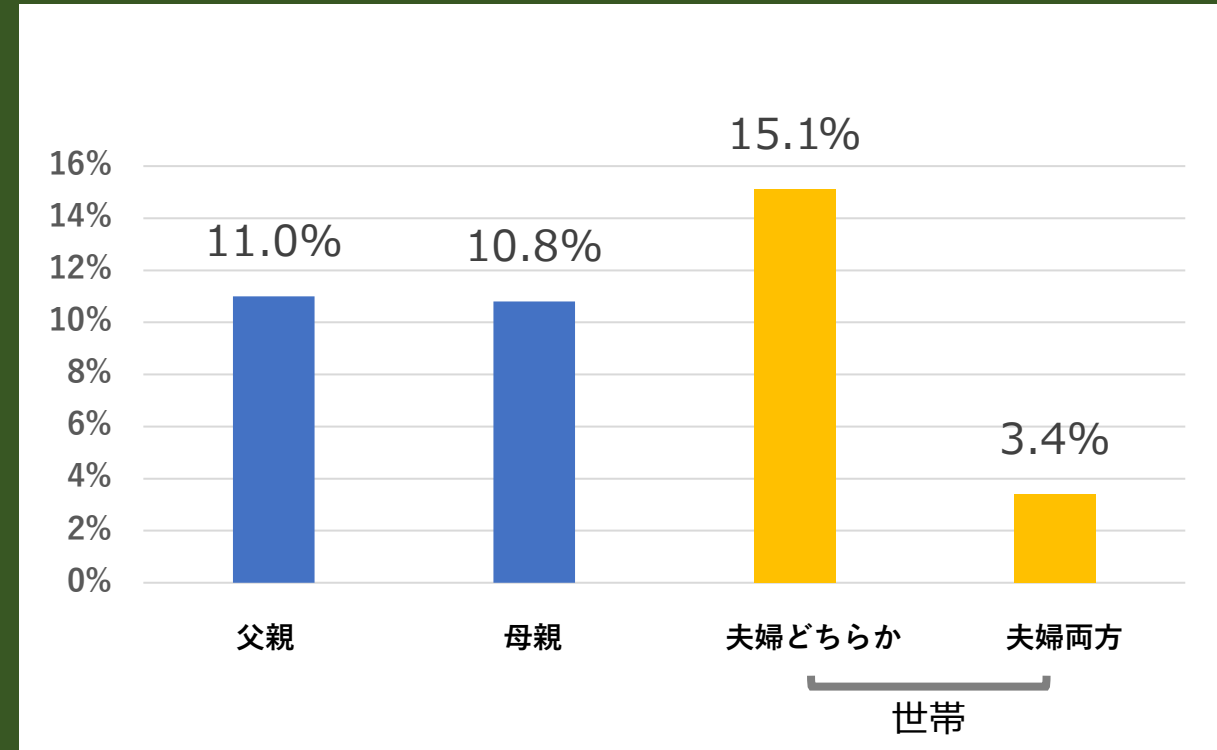
• 背景・要因：

国際的に「父親の産後のうつ」が注目されはじめ、国内の実態把握が必要

• アウトカム：

K6で9点以上を“産後うつ  
のリスクあり”と判定  
(産後1年未満)

• 結果：



- 産後1年間でK6により精神的な不調のリスクありと判定された（9点以上）父親は11.0%であり、母親の10.8%とほぼ同水準だった。また、夫婦同時期にリスクありと判定された世帯が3.4%に達した。
- 母親の睡眠不足や父親の長時間労働などが、同時期に夫婦両方がリスクありと判定された世帯になることのリスク因子であると示唆された。

# 父子（ひとり親）世帯における父親の精神的不調の割合と関連する要因を明らかにする

- データ：  
国民生活基礎調査（2016）

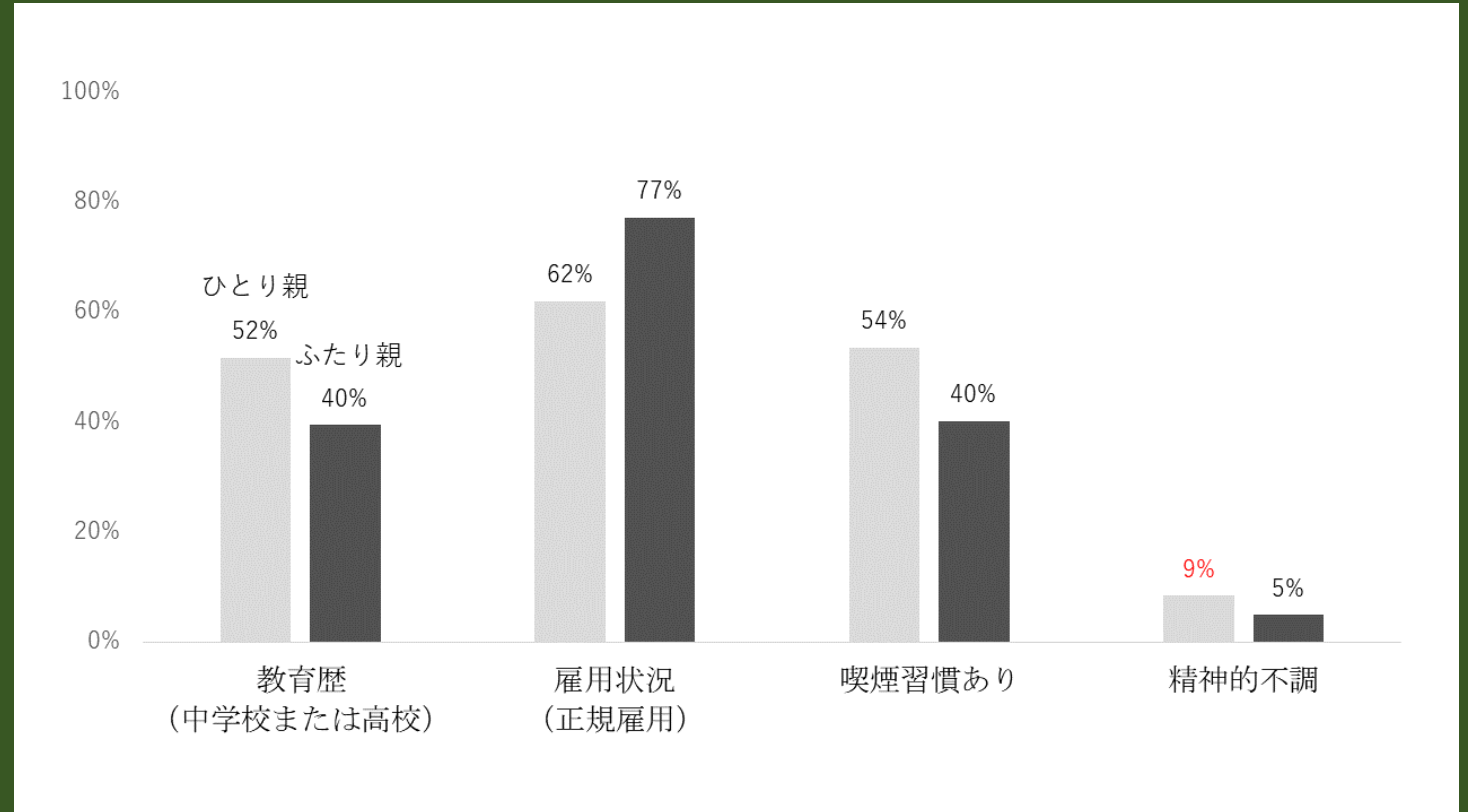
世帯票・健康票

- 分析対象者：父親  
868人（ひとり親）  
43880人（ふたり親）

- 要因：  
年齢、教育歴、雇用の状況、労働時間、喫煙、飲酒、世帯形態等

- アウトカム：精神的不調（K6尺度合計点 $\geq$ 13点）  
ひとり親（8.5%）  
ふたり親（5.0%）

- 結果：



- 精神的不調の割合は、ふたり親世帯の父親と比較して、ひとり親（父子）世帯の父親で高かった。
- ひとり親世帯の父親の公的支援の必要性が示唆された。

## Research Question

# 介助を必要とする子どもがいる世帯における父親の健康状態を明らかにする

• データ：  
国民生活基礎調査（2016）

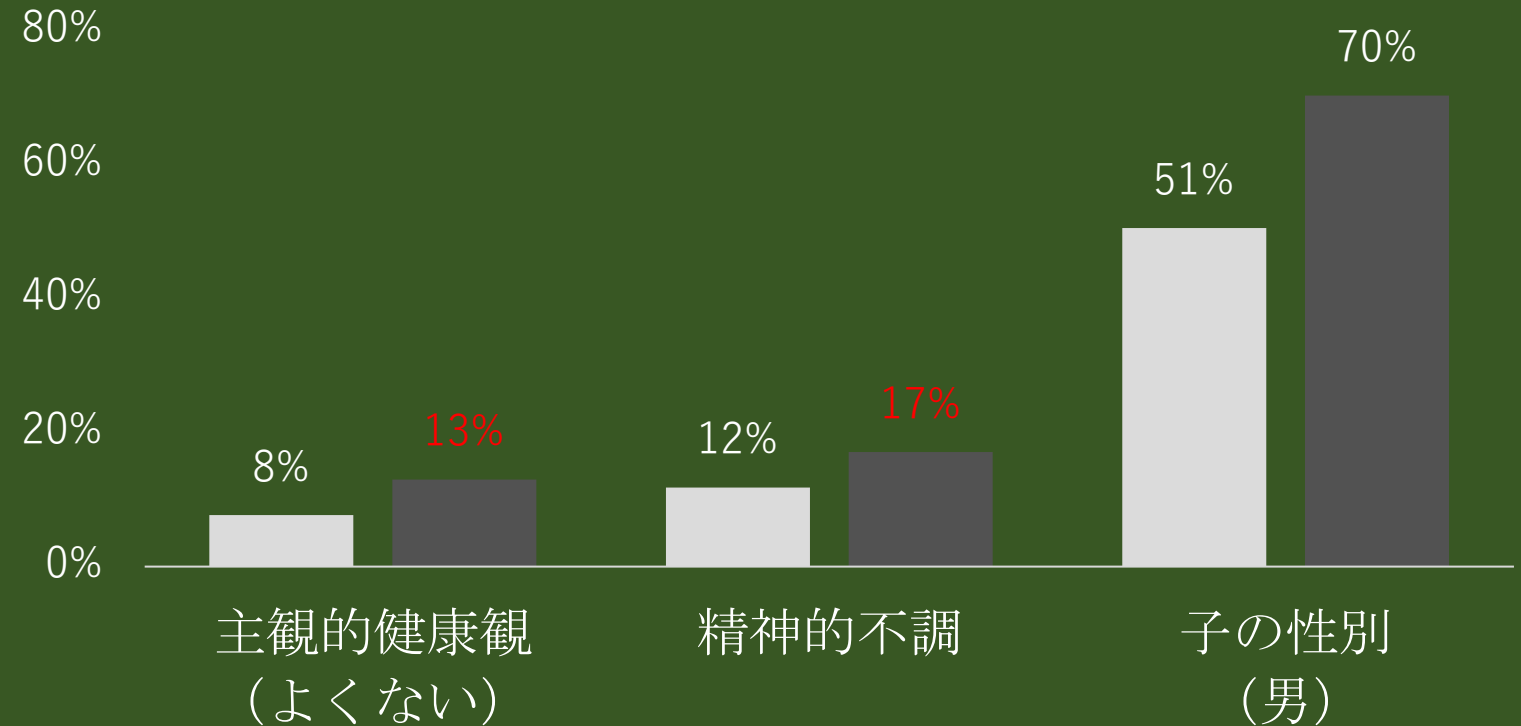
世帯票・健康票

• 分析対象者：父親  
438（介助が必要な子どもがいる世帯）  
27682（いない世帯）

• 要因：  
介助の必要の有無  
（介助が必要が3ヶ月以上）

• アウトカム：  
精神的不調（K6尺度 $\geq 9$ 点）  
主観的健康観

• 結果：



• 精神的不調および主観的健康観が良好でない割合は、介助を3ヶ月以上必要としている子どもがいる世帯の父親で高かった。  
• 介助が必要な子どもがいる世帯の父親への支援の必要性が示唆された。

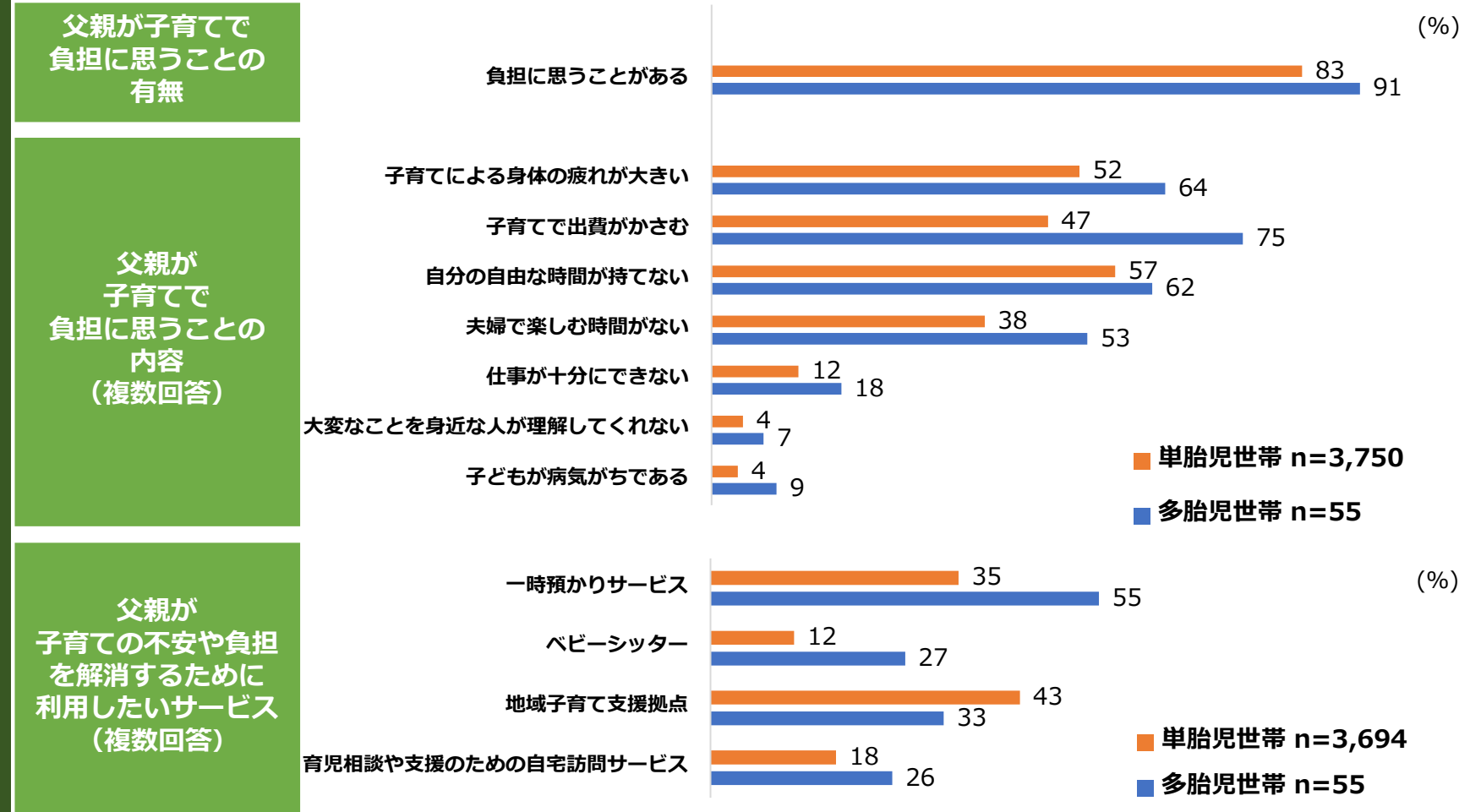
# 多胎児世帯の父親は単胎児世帯の父親に比べてどのくらい子育てに負担を感じているのか？

• データ：  
21世紀出生児縦断調査  
(平成22年出生児)

• 分析対象者：  
• 調査票回答者の属性が父親である世帯（3805世帯）  
• 第1回調査（生後6か月）

• アウトカム：  
• 父親が子育てにおいて負担に思うことの有無とその内容  
• 父親が子育ての不安や負担を解消するために利用したいサービス

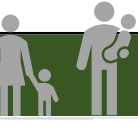
• 結果：



• 多胎児世帯の父親は単胎児世帯の父親に比べ、子育てにおいて体力・金銭・時間などいずれの面でも負担を感じることが多く、各種サービスを必要としている。

父親の育児への関わりが  
母親に与える影響

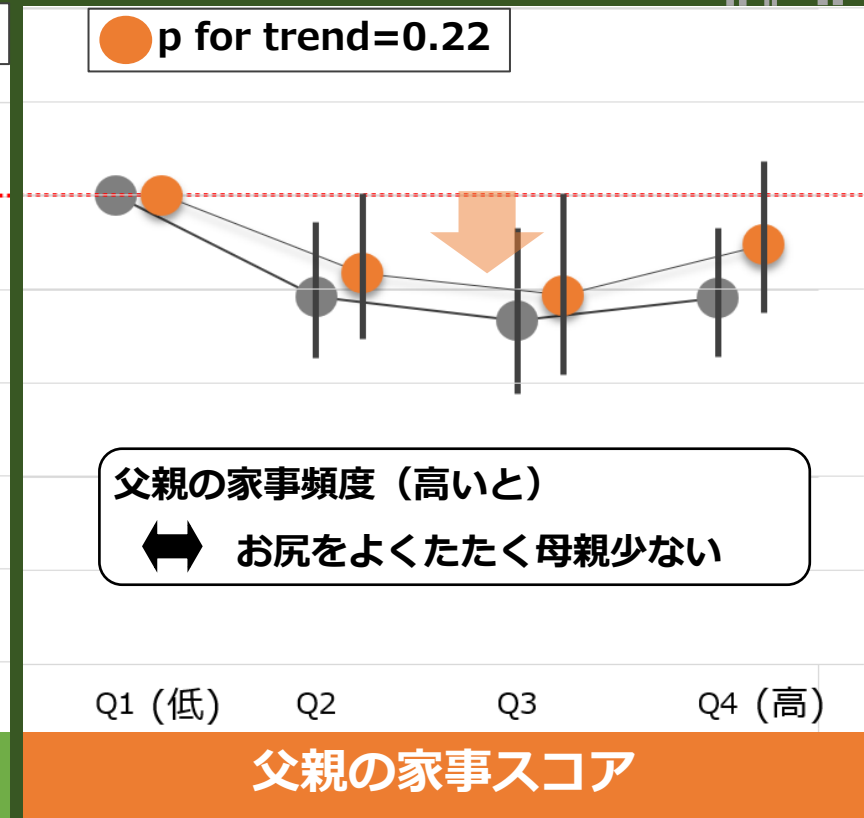
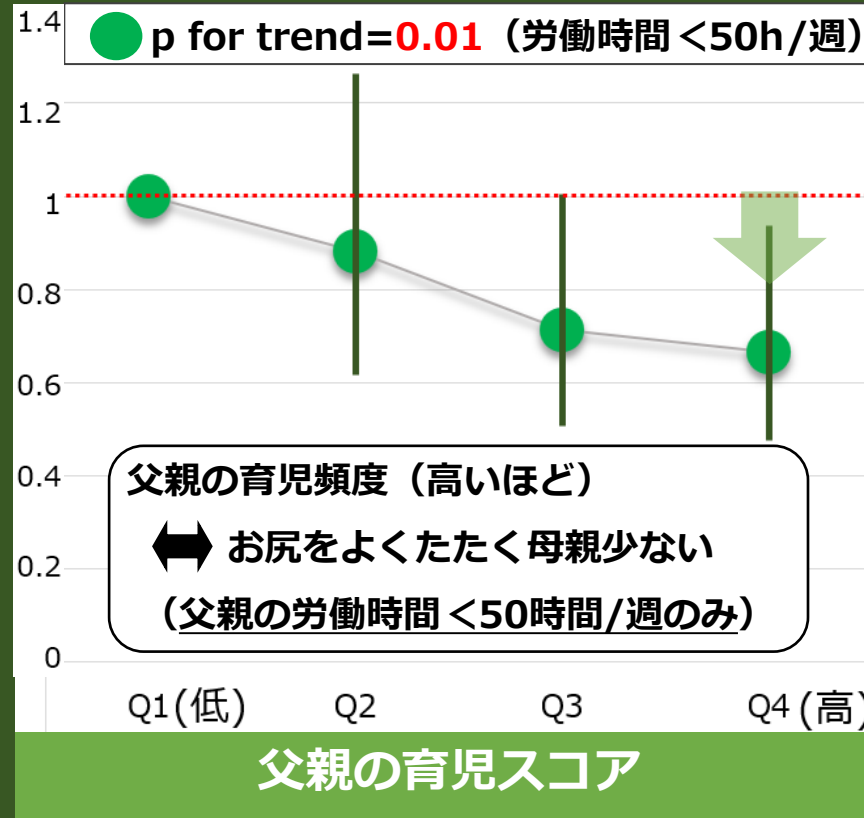
# 父親の家事・育児頻度は、母親のしつけ行動に影響を与えるか？



- データ：21世紀出生児縦断調査 (平成22年出生児)
- 分析対象者：17,573人
- 要因：父親の家事・育児頻度 (2010年：児6か月時点)
- アウトカム：母親が子どものお尻をよくたたく835人 (2013年：児3.5歳時点)



結果：



- 父親の家事・育児頻度が高いと、母親が子どものお尻をよくたたく傾向が低い可能性がある。
- ただし、育児頻度との関連は、父親の労働時間により異なる。



父親の育児への関わりが  
子どもに与える影響

# 乳児期の父親の育児への関わりと16歳時点での子どもの心理的ウェルビーイングに関連は見られるか？

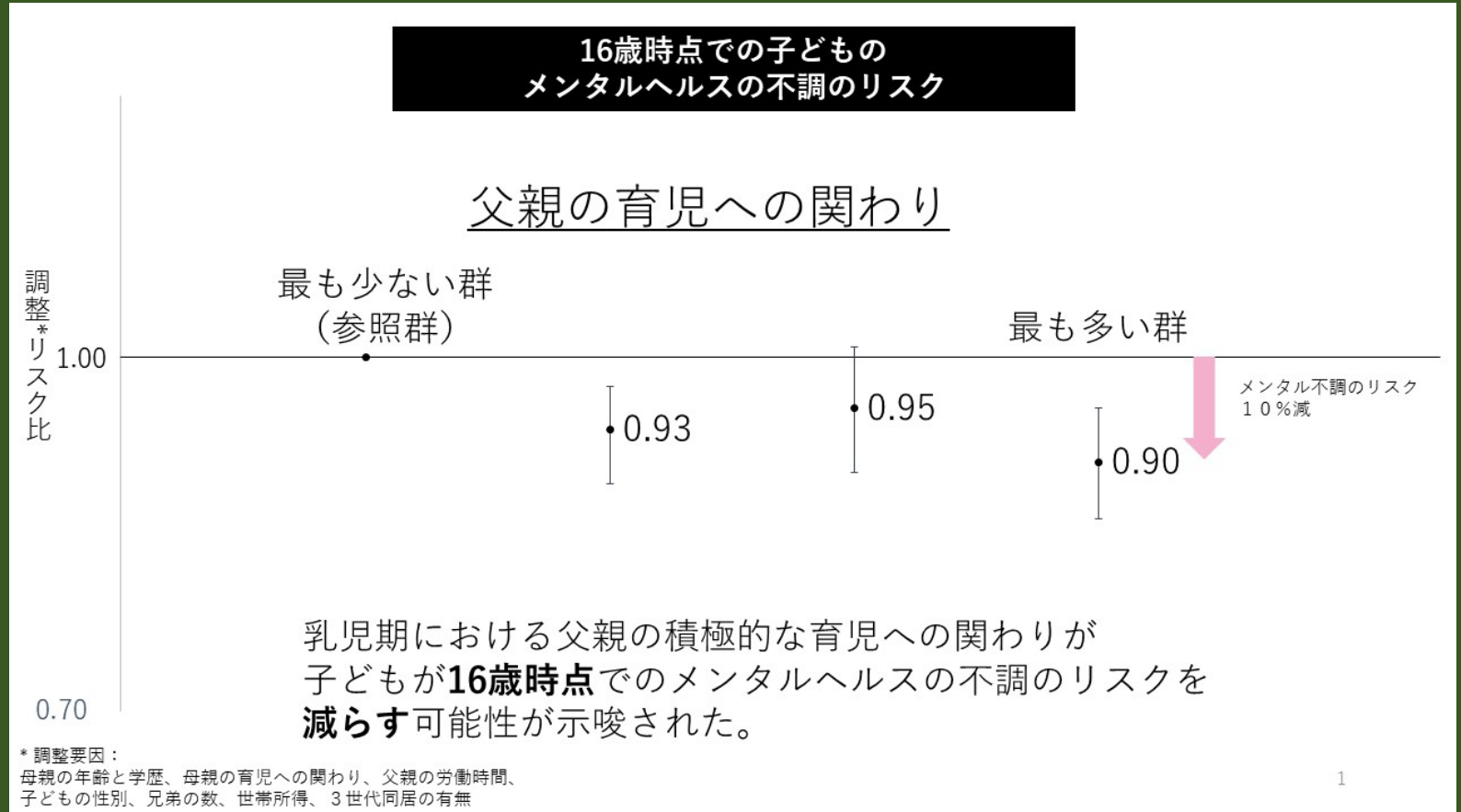
• データ：  
21世紀出生児縦断調査  
(平成13年コホート)

• 分析対象者：18510人

• 要因：  
父親の育児への関わり  
(第1回)

• アウトカム：  
16歳時点での心理的ウェルビーイング (WHO-5)  
(第16回)

• 結果：



乳児期における父親の積極的な育児への関わりが子どもが**16歳時点**での**心理的ウェルビーイングの低下**のリスクを**減らす**可能性が示唆された。

1. 目的と概要
2. 得られた知見の紹介
3. まとめと提言

# 一連の研究を通じての考察 1

父親の積極的な育児への関わりが求められているが、**父親も万全な状況ではない。**

- やはり、多くの父親が長時間労働である 【02】
- 長時間労働であると育児に関われない 【03】
- 精神的不調がある父親が一定数いる 【01】

特に、リスクのある集団ではその傾向が顕著

- ひとり親（シングルファーザーの世帯） 【06】
- 介助を必要とする子どもがいる世帯の父親 【07】
- 多胎児がいる世帯 【11】

# 一連の研究を通じての考察 2

一方、父親の積極的な育児への関わりには、  
母親および子どもへの**メリットがあった**。

- 乳児期の父親の育児への関わりが、3.5歳時点で  
母親が不適切なしつけをしないことに関連していた

【08】

- 乳児期の父親の育児への関わりが、16歳時点での  
子どもの心理的ウェルビーイングの低下の予防に関連していた

【09】

# 提言

育児に関わりたいと思う父親が、  
育児に関われるような環境づくりを  
していく必要がある。

# メンバー

市瀬雄一（がん研究センター）

近藤天之（成育）

大塚美耶子（成育）

竹原健二（成育）

越智真奈美（保健医療科学院）

Bibha Dhungel（成育）

可知悠子（北里大学）

永吉真子（名古屋大学）

加藤承彦（成育）

新村美知（成育）